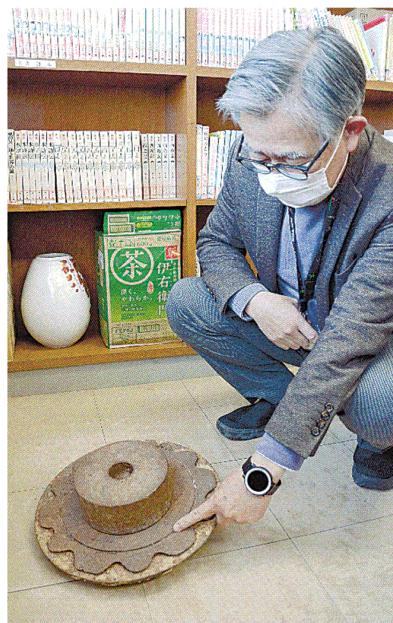


# 佐賀空襲“語る”焼夷弾残骸

## 佐賀市・北川副公民館保管、鋳鉄製の円盤



佐賀空襲が起きた佐賀市北川副町で見つかった焼夷弾の残骸。鋳鉄製で円盤の形をしている。佐賀市の北川副公民館

戦後  
80年をさが

さん(66)は円盤に目を向けながら「こんなものが空から落してきただとは。当たらひとつたまらない」と語る。

保管に至った経緯は不明だが、2009年ごろ、北川副小近くの道路での下水管埋設工事で見つかったといふ。六角形の金属容器に入った焼夷弾を38本束ねた「集束焼夷弾」の弾頭とみられる。投下する際のおもりだ。公民館長の坪上忠正

命を奪った。ベトナム戦争

佐賀市の北川副公民館に、大人1人では抱えきれない重さの鋳鉄製の円盤がある。歯車のような形をしていて、色は落ち、赤みがかった表面が重ねた月日を物語る。80年前の1945(昭和20)年8月。太平洋戦争の終戦直前に起こった佐賀空襲の焼夷弾の残骸で、地域の惨禍を刻んでいる。

□5面に関連記事

## 地域の惨禍、風化させず

さん(66)は円盤に目を向けながら「こんなものが空から落してきただとは。当たらひとつたまらない」と語る。

戦時中、米軍が用いた兵器の焼夷弾。中にはゼリー状の燃料「ナパーム剤」が詰められていた。日本式の木造家屋を燃やす実験を経て開発され、ガムのようにくつつくため消火するのが難しい。33万発が投下された45年3月の東京大空襲で

佐賀県は戦火を免れてきた。だが、戦局は悪化の一途をたどり、45年8月に佐賀市と鳥栖市で大規模な空襲に見舞われた。北川副町を含む佐賀市南部は5日深夜から日をまたいで緜毯(じゆたん)爆撃に遭い、61人が犠牲になつて壊滅的な被害を受けた。

あれから80年。新興住宅地になっている北川副町では、戦争体験者も少なくなっている。坪上さんは「空襲を知らない若者や子どもが増えている。戦争の記憶を風化させてはいけない」と言う。円盤の公開とともに、平和の尊さを受け継いでいく活動を考えている。

(大田浩司)